

ローザは立ち上がらなかった いや立ち上がった

校長 村井 浩昭



それは、1955年アメリカ南部のアラバマ州モントゴメリーで起こった。

百貨店での仕事を終え、帰路に着いたローザ・パークスは市営バスに乗った。当時アラバマ州などのアメリカ南部の州にはジム=クロウ法と呼ばれる人種分離法が施行され、レストランやバスの座席は黒人席と白人席に明確に分けられていた。ローザはバス後部の黒人席の最前列に座っていたが、白人席が満席になり、黒人の乗客4名は運転手から白人に譲るため席を立つよう命じられた。3名は席を空けたが、ローザだけは立ち上がらなかった。運転手が「立たないのなら警察を呼んで逮捕させるぞ」と言い、彼女は「どうぞ」と答えた。

彼女は逮捕され、このことがきっかけで、モントゴメリーでバス・ボイコット運動が広がり、やがて、黒人をはじめとする有色人種がアメリカ市民（公民）として平等な地位を獲得しようとする公民権運動へと発展していく。首都ワシントンのリンカン記念堂前での「I Have a Dream（私には夢がある）」の演説で有名なキング牧師が、人種差別の撤廃と各人種の協和という目標を掲げ公民権運動を引っ張っていくのだが、ローザの行動がキング牧師の運命を変えたとも言われている。ローザは後に「疲れていたから立たなかった。身体が疲れていたのではない。The only tired I was, was tired of giving in.（唯一の疲れは、差別に屈服することに疲れていたことだった。）」と述懐している。

歴史上最も売れたソロ・アーティスト「エルヴィス・プレスリー」をご存じだろうか。その伝記映画『エルヴィス』が7月1日に公開される。予告編では、「やせっぽちの男がスーパーヒーローになった瞬間」とテロップが流れ、登場したエルヴィスは、ピンクのスーツで歌い始める。

彼が登場したのも1950年代で、初期の演奏スタイルは、黒人の音楽であるブルースやR & B（リズム・アンド・ブルース）と白人の音楽であるC & W（カントリー・アンド・ウェスタン）を融合したものであった。それは、深刻な人種問題を抱えていたアメリカでは画期的なことだった。公民権運動が広がるにつれて、白人と黒人の溝が逆に深まってしまったことを、白人でありながら黒人のように歌うパフォーマンスがその壁を乗り越えた。人種問題を観念や理屈で解決するのではなく、白人と黒人が手を取り合って歩む道を模索し始めたという点で、彼は音楽的にも社会的にもセンセーションを巻き起こしたと言える。

ホームルーム担任をしているとき、ブルーハーツの「青空」を教材化したことがある。そのサビの歌詞「生まれたところや皮膚や目の色でいったいこの僕の何がわかるというのだろう」に共感するのだが、個人的には「運転手さんそのバスに僕も乗っけてくれないか」の部分が、ローザ・パークスのバスでの出来事と妙に重なり、捉え方次第でいろんなことが時代を超えてつながっているということを伝えたかった。エルヴィスの曲のルーツとなるブルースは黒人が生んだ音楽のジャンルである。奴隷として扱う白人への不満「Blue（憂鬱）」を吹き飛ばすため、ギター片手に集まりセッションを行う。それがショービジネスに発展し、ピンクやイエローの原色でダブついたスーツで演奏するミュージシャンが登場する。

エルヴィスのピンクスーツは、それを意識したものに違いない、なんて考えるとまたいろんなことがつながってくる。